

# 国勢調査にみる在日コリアンの社会経済的地位の動態

## ——(2)労働市場におけるニッチの変遷——

徳島大学 樋口直人

### 1 目的

この報告の目的は、1980～2010年（ないし2005年）の国勢調査データから、在日コリアンの仕事の動態を分析することにある。在日コリアンの仕事については、就職差別とそれゆえのエスニック・ビジネスへの進出が語られてきたが、データの制約ゆえに実証研究の数が限られてきた。韓（2010）によるエスニック・ビジネスの研究は画期的なものだが、在日コリアンの仕事の全体像を描くものではない。その結果、エスニック労働市場と一般労働市場の間での就労、社会移動、エスニック経済の変遷は未解明の領域として残されている。それに対して報告では、主として米国の移民の労働市場や階層に関する研究に依拠して分析枠組みと仮説を提示する。具体的には、エスニック・エンクレーブ化、経済的同化、階層分極化、エスニック経済の脱産業化といった仮説群を整備し、現実にはどのような変化が生じているのかを明らかにする。

### 2 方法

データとして用いるのは、前述の国勢調査オーダーメイド集計である。この集計にはさまざまな制約があるが、悉皆調査であること、職業小分類や学歴と職業の関係まで聞いている点で、現時点で望みうる最良のデータであることは間違いない。パネル調査ではないこと、ニューカマー韓国人が80年代以降増加していることを考慮しつつ、コーホート効果、加齢効果、時代効果に分けて分析することで、在日コリアンの職業ニッチの変遷をみていくこととする。

### 3 結果

まず、若年層（66年以降生）の自営業離れが進んでいる。それまで30代～40代後半が自営業主となる「適齢期」であり、団塊世代は50歳になると2割が自営業主になったが、若年層では1割以下で頭打ちになる可能性が高い。自営業の中核だった団塊およびその下の世代でも、自営業離れがみられる。団塊世代の自営業主比率は、95年がピークでそれ以降低下する。これは廃業したがゆえの低下であり、50代の失業者が急増している。つまり、エスニック経済を支えてきた自営業の雇用吸収力が低下した結果、中高年層が職を失う状況が生まれている。若年層の場合、自営業離れの原因は別のところに求められる。ホワイトカラー比率は、若くなるにつれて日本籍と韓国・朝鮮籍の差が縮まっている。特に70年代生まれになると、まだ格差はあるものの日本籍との差が大きく縮小した。ニューカマー韓国人の影響を除いても、若年層では格差解消が進んでいるといえる。

### 4 結論

在日コリアンに対する就職差別は、年を追うごとに目立たなくなり、経済的同化が進んでいる。若年層は、自営業に頼らなくても仕事を探せるようになり、職業選択の幅は広がった。しかし、自営業で身を立ててきた中高年層のうち、商売が成り立たなくなって失業へと追い込まれる者が増えている。在日コリアンのエスニック経済は全体として縮小しつつあり、それがもたらす結果は年代によって異なるが、中高年が割を食っている。つまり、年代によって異なる仮説が当てはまり、エスニック・エンクレーブ化と脱産業化→若年層の経済的同化と高年層の階層分極化と推移している。

### 文献

韓載香, 2010, 『在日企業の産業経済史』名古屋大学出版会.